

村野次郎創刊

香蘭



2025年(令和7年)3月号

犬山俊昭歌集『まほろば』批評小特集

第102卷

第3号

通卷1131号

二〇二五年(令和七年)三月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第一〇二卷第三号



香 蘭

2025年(令和7年)3月号
犬山俊昭歌集『まほろば』批評小特集
第102巻 第3号 通巻1131号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(115)	河野 慎 二	表二
招待作品(奇数月連載) ⑨ 風の束	加藤 英彦	2
作 品	一	4
二	24	4
三	37	24

推薦香蘭集

香 蘭 集

作品一 十首選(一月号) 千々と久幸選

作品二・三 十首選(一月号) 桜井 京子選

村野次郎への旅(179) 昭和期の「香蘭」(十四)

「香蘭」が日本短歌雑誌連盟から四回目の「優良歌誌賞」を受賞

続・酔風船(15) 文人と医者

一頁公論(46) もう一度訪ねたい場所——宮城県大川小学校

明宝研究会第一五九回 十二月例会 犬山俊昭歌集『まほろば』を読む会

(批評小特集 津金規雄、小笹、川久保、千々と、渡辺)

エッセイ・自由研究 ルビ考

焦 点(一月号) 季節感のある歌

七 首 抄(一月号)

作 品 評(一月号)

作品一	大井田・柏原(義)・近藤(純)・坪井	52
作品二	土井 紘二郎	54
作品三	丸 山 三枝子	56
香蘭集	高 畠 憲 子	58
	古 澤 正 道	60

緑 地 帯	原 礼子・岡 田 和代	62
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向		64
歌会及び会合・会員消息・他		69

編集後記・新宿日記		74
表紙絵	山口 蓬春「桔梗」	表三
目次・緑地帯カット	和田 和雄	表三

僅かなる安息ありて枯芝にのこる

夕日の明るさをふむ

『村野次郎歌集』

一読で了解できる平明な歌である。昭和三十七年、先生、六十八歳の作であるという。

村野短歌については、「人生を詠う」もしくは「人生の達人の歌」などという評がたびたび為されており、私もその意見に反対でないが、要するに日々を丁寧に生きてゆく、そのような哲学者の人の歌だろう。

文学者と実業家、二つの顔を持ちながら、秀歌を紡ぎ続けてゆく、そういう暮しに十分な余暇があつた筈がない。些細な事で、すぐに心を腐らせてしまふ、投げてしまふ、飲酒に走つてしまふ、このような私には届き得ぬ、そういう種類の目配りであるに違いない。

一首の背後には、「安息」を得ただけで、具体的な事柄は述べられてない。事象より風味を味わうべきなのか。私には地の上の足の運びしか見えない。幽かなる憂いを帯びつつ、しかし、西日の映えた足元の景はあまりにも眩しい。

加藤 英彦

風の束

水深三〇メートル緊まりゆく冷えにゆれて胎児が目をさます朝

鼓膜ふるえるほどの空砲あれは朝のなんの羽ばたき、だれの叫びか

堤防の排水口に走る舟虫をいくつ掴んできて海に捨つ

そう、これはあなたの息子この家を出でて戻らぬアルバムを閉ず

いつもいつも過ちばかりを繰り返す私がわたしであろうとすれば

湊ひとつ呑みこむ巨き津波などきれいに忘れてほほえむ母は

前後左右をたしかめながら土を蹴るだれも戦いたくなんかない

逃げまわる舟虫がふと振りむくとあの日のわたしの怯^おじし目と遇う

泣きじゃくる妹をかばうわが母を切りころせと渡されたる銀の斧

すべては風に攫われてゆけガザの地に沁みたる哀しみや憎しみの血は

小学三年の夏くらいまでわたしたちはよく戦争ごっこをした。福岡では自宅近くの海辺の岩場で、校舎の階段の隅で、東京に越してからは団地の裏の空き地で敵と味方に別れて戦った。廃材が銃で小石が手榴弾だった。TVでは「コンバット」が人気だったころだ。四人が二人ずつに別れて一人が軍曹で一人は二等兵だった。味方は二人だけなので、撃たれたらすぐに生き返らないと戦争が終わってしまう。わたしたちは腰を低くして走った。何のために戦っていたのだろう。戦争には目的があるはずなのに、戦う正義も護るべき国土もなかった。戦う意味など求めていなかったし、当たり前だがそこには戦争の悲惨さが決定的に欠けていた。休戦の合図は夕ごはんの香りであった。どこかの台所から味噌汁やカレーの匂いがすると、わたしたちは戦争をやめてあっさりと家路について。

ウクライナの冬は寒いだろう。一月の水点下は珍しくないで、電力インフラを爆撃されるとひとたまりもない。年明けの三日間だけでロシアの無人機攻撃は三百機以上、弾道ミサイルは二十発が撃ち込まれたという。ロシアによるウクライナ侵攻が始まって以来、

両軍の戦死者は二十四万人を超えた。民間人を含めれば犠牲はさらに大きくなるはずだ。戦争の悲惨さが数だけで測れないことはいうまでもない。一人ひとりはどこでどのような殺され方をしたのか。目を覆いたくなる現実がそこには無数に横たわっている。

今の子供はわたしたちのやった戦争ごっこなどもうしないだろう。ネットで検索すれば「最新版・戦争おすすめPCゲーム」のランキングなど幾らでも出てくる。兵器は高性能で殺戮は驚くほどリアルだ。ただ、このリアルさには人を殺す痛覚がない。

敵も含めた戦死者の少なさを競うゲームはないか。市街を攻撃したら減点、病院や学校を爆撃したらゲームオーバー。敵ひとり殺したらその妻子や父母の哀しみの量だけこちらが血をながすハンディを背負ったゲームはないか。いや、そもそも哀しみの量を数値化して競うゲームなどあつてはならない。

きつとわたしも殺すだろう。病床の無抵抗な老母に銃口を向けられれば、その銃を奪ってでも相手を撃つにちがいないのだ。そのとき、わたしの目は殺した兵士の妻子の哀しみの量にみあう血を流すだろうか。

四 選 者 の 作 品

時雨降る窓 平塚 千々和 久 幸

鱈酒たらしを注文したる三人の鼻先が灯に光れるを見つ

ひと言も残さず刑死されにける広田弘毅を時に思うも

思い出が憶おぼえてゆくときわが内の小さな村が夕焼けている

センセイはそんなに飲んではいけませんお酌するのは昨夜よるの狐ぞ

吉原はいかになりしか宴会の酒まわる頃思い出でつも

約束を果たさぬままに去りゆきし人はいかにか時雨降る夜は

博多産のどんこラーメン食いており死ぬまでわたしは九州が好き

渡されしメモ持ち売場を巡りゆく妻が元氣にあり得たる日は

そして夕暮れ 我孫子 丸 山 三枝子

いくつかの町を濡らしてわが町にきた時ならぬ雨に濡れゆく

えりくびを冷たき風が吹き過ぎて黄の冬薔薇きんぎょつぼみをほどく

杜鵑草、アキノキリンソウ、女郎花 思い思いの彩にて咲ける

わたくしの不足きつぱり指摘され肯うけいでいる そして夕暮れ

取り返しつかぬ思いに歩きおり公孫樹あかるき師走の街を

極月の交差路を行く雑踏に混じりて今は誰とも無縁

本心をはぐらかしたるアホバカと擲なげして鳥は飛びたちゆけり
すはだかの櫛くし並木を青空に向かつて歩く極月のあさ

非在といふは 東京 桜井 京子

ひつそりと咲けばいいのにひと処とほつはぶきは咲き黄の鮮やけし

藪枯らしに尻糞しつぽん葛が絡みつき何処へも行かず冬に入りたり

わがひと日出掛けし部屋に日が差して豊かなるかな非在といふは

わたくしはもうわたくしではないらしい顔認証を拒まれし日よ

何度でも身を投げ出しては立ち上がる昼の噴水しばらくを見つ

今はまだ海にも空にもなれないが白雲になるいつか私は

公園に重機が入り樹が伐らるレストランなぞ無くてもよいに

スカイツリー今宵も灯るを眺めては行きしことなし夫も私も

パローレ・パローレ 横浜 渡辺 礼比子

プラタナスの落葉を散らす北風に逆らいながらどこまでも行く

今日こそは脱稿せんと決意して部屋に響ならせりロレーヌマーチ

つぎつぎと人逝く年か石路の花のささやく 「人は死ぬのよ」

ユーチューブに飽かず見惚るる聞き惚るる アラントロンの「甘い囁ささき」

老いてなお色好みとぞ嘲笑わらわれし源典みなとのすけ侍まだ五十七歳

病む医師に閉院すると告げられぬ 言葉に窮きつて言う「おだいに」

なごやかに、とはいかざれどそれぞれのブライド保ち相統終えぬ

海の上に秋の花火の散りゆけり 一生ひとよ届かぬ思いもあるを

作品一 十首選



(二月号作品から)

千々和 久 幸 選

・道端の彼岸花にも身を屈め一首成さんと手帳を開く

青山 侑市

作者の作歌への常日頃の執念が生んだ、手堅い一首。何処へ行くにも作者は手帳を携行し、作歌の素材になりそうな事柄は書き留めておくのだ。内容は平明かつ明晰だからトレースの要はなからう。

あえて言えば二句の「にも」は並列の「も」かそれとも韻律を整えるためか、わたしの氣息からすれば「も」はなくとも息継ぎは出来るが、作者は定型を尊重したのである。

・夏の夕紺の鼻緒の下駄でゆく橋を渡つてあの銀河まで

石井 雅子

粹で洒落た歌を見せてくれる作者だが、この一首もその範疇にある。お伽噺か童画の世界を思わせるロマンティックな雰囲気のお歌だが、コテコテのリアリズム信奉者は結句の銀河まで飛べまい。これを嘘臭いと読むか、ロマンの所産と読むかで評価が割れよう。

どちらの側に立つにせよ問題は初句の措辞と位置。初句はこのままでは説明っぽくて粹にも洒落とも遠い。ならばいっそ初句を賑やかに「手を繋ぎ」まで飛ばせばと思うが、甘過ぎようか。

・何となく始めてしまった 鉛筆と紙さえあればなんて言われて

伊藤 康子

うふふふ、ここにもお決まりの軽口に乘せられて歌人になった人が居たかと苦笑した。でも紙と鉛筆は嘘では無かった、駆け出しの頃は！しかし短歌にどっぷり浸かってしまえば、歌会にも出るし関連の書籍も読む。また仲間との付き合いも仲間の歌集も思っているうちに、自分でも歌集が欲しくなる。

はてさて今さらコストが掛かるからと回れ右もならず、である。大方の歌人はこうして一人前になっていくのだ。作者は「香蘭」では今や数少ない職場詠の旗手として貴重な存在である。

・ゆうぐれの棹の上なるあきあかね もう遅すぎることの数々

江口 絹代

上句と下句が別々のことを言いながら一首の統一感を醸成する手法は、前衛短歌時代の名残だが、今日では広く一般化された技法になった。問題はその距離間(照応)にある。近すぎれば凡庸になり、遠すぎれば判じ物になる。

この一首、己の人生の秋に引きつけて自らが抱えている負の感情を詠ったが、上下句の距離が性急過ぎないか。これは感覚の問題だから色々のフレーズを宛がって「当たり前」と納得出来るまで言葉を出し入れしてみるほかはない。

・ウリ坊が三匹檻にかかりたりこれから生きる筈だったのに

柏原 義清

身辺詠を境涯詠に溶解させたところがベテランの味。ウリ坊はイノシシの子、こいつが農作物を荒らして悪さをするのだ。ゴルフ場でも招かれざる客で、ウリ坊の出そうな所に電線を張り電流を流し

たりしている。ことほどさように嫌われものであるウリ坊を生け捕りにした作者は、ウリ坊の立場でこの不運を憐れんでいるのだ。檻にさえ掛からねば生き延びられたものを、と。

晩年に達した作者は己の余生に重ねて、生きとし生けるものの命へ寄せる思いが深いのだ。

・町内の少し遅れた夏祭り請われて特技の皿をまわせり

近藤 光子

芸は身を助けるというが、この人にしてこの歌有り。作者の皿回しの妙技はかつて「香蘭」の全国大会の折にも披露され、やんやの喝采を浴びたものだ。どうやらこの特技は足利近辺でも評判を取っているらしい。作者みずから「特技」と言って憚らぬところにホノボノとした愛嬌がある。

となれば今年の全国大会でもぜひこの妙技にお目に掛かりたいもの。ついでに「香蘭」100周年誌の歴史的資料(珍芸編)として追加してもよからう。

・キッチンの小さな椅子に立てこもる私なんて、私なんて、

中村かよ子

この作者がひとたび詠えば雲を呼ぶか龍ともなるか、世界の耳目はその一首に集まる。が、今月はなんと「私なんて、私なんて」と内にある負の感情を扱いかねて、家の隅っこの「キッチンの小さな椅子」に逃避しているのだ。

もともと変幻自在で何処へでも飛翔する詩的捻転が作者の持ち味だが、一連には「灯を消せば同じところに光る皿今日と昨日が入れ替っても」といった、正統リアリズムに近い歌もある。

・毒を吐くこともいつしか無くなりて最近何だかお腹イッパイ

中村 美幸

お久しぶりと言うべきか、お帰りがなさいというべきか。嬉しいことにかつての「放埒」娘の歌に毒が未だに残っていたは褒めてやりたい。さなきだに昨今の「香蘭」は上手い歌が多くなったのは良いが、毒にも薬にもならぬ歌が増えたのは褒められたものではない。

この作者が毒を吐かなくなったらフツのおばさんである。

・生かされし命の日日を畑の草夫と引きゆく土にまみれて

室橋 玲子

生きることへの感謝が生んだ一、二句の重みを見よ。思わず襟を正したくなるではないか。この作者が不自由な身を養いながらリハビリを兼ねて懸命に農作業に勤しむ姿に頭が下がる。

それだけに夫をはじめ周辺の人には誰もみな作者に温かくまたやさしい。「玲子ちゃん、今月もコーリヤン(香蘭)が来たよ」と待ち望んだ「香蘭」誌を手渡してくれたのは母である。

・亀虫は嫌はれながら亀虫を生きねばならず窓の辺にある

桜井 京子

どこかに箴言的な匂いの残る歌。作者は自らを亀虫に擬えて、自らが自覚している性格を変えようとしているのだ。Character deare changeという諺もあるが、敢えてこの考え方に抗して己の生き方を正そうとする姿勢は見上げたもの。

多かれ少なかれ人間誰しも、自分の厭な性格を変えたいと願っている。変えようという自覚があれば性格は変えられる、作品はそんな固い意志を窓の辺にずらして知らぬ顔をしている。

作品二、三 十首選



(一月号作品から)

桜井京子 選

・資料館にオバマの折鶴見る時も私は忘れず 視察十分

小笹岐美子

オバマがアメリカの現職大統領として初めて被爆地広島を訪れたのは2016年のこと。その際に自ら折って持参したという折鶴が、今も原爆資料館に展示されている。当時、オバマの資料館訪問は平和を希求する大統領の美談として語られたが、その視察がわずか十分であったとは。作者は形ばかりの訪問だったと強いトーンで非難する。原爆投下から七十年以上経過してようやく実現した被爆地への訪問であったが、原爆の恐ろしさが世界の人々に本当の意味で理解される日はまだ遠い。虚しい気持ちがかみ上げる。

・真夜目覚め秋の七草言ってみる何度も言えど一つ出で来ず

小林ますみ

秋の夜長、一度目が覚めてしまうと、なかなか寝付けなくなるのだらう。かつて教師であったと聞く作者は、こんな時は秋の七草を口に出してみるのだ。よく知られるところでは「万葉集」の山上憶良に「萩の花尾花葛花などしこの花女郎花また藤袴朝顔の花」がある。実は私もなかなか覚えられないが、短歌のリズムで覚えるなら「ハギ・キキヨウ、クス・フジバカマ、オミナエシ、オバナ・

ナデシコ、秋の七草」が良いとされる。一方で「香蘭」二月号の城富貴美さんに次の歌がある。「七草をオスキナフクハの頭文字に教へられたり「オ」は女郎花」。言うまでもないが「オミナエシ、ススキ、キキヨウ、ナデシコ、フジバカマ、クス、ハギ」である。こんな感じで言えたら、作者も安心して眠れるだろう。

中井 房江

・稲架掛けの終われば山の木通とり野ぶどう榎の実はるけき秋よ

稲架掛けは、束ねた稲を稲架という物干しのようなものに掛けて天日乾燥させること。毎年農家では稲刈りの時期になると、家族総出でこれを行うのだろう。この作品は作者の子どもの頃の記憶をたどったものと読んだ。稲架掛けは嫌でも手伝わされたが、その後は、山に入って木通などの秋の稔りをおやつ代わりにして楽しんだのだ。郷里を出てからも、いつも秋になるとその記憶がよみがえり、今の作者の内面を豊かなものにしていくと思える。

・本当の幸とは何か柵の中に右往左往するホッキョクグマよ

中村 陽子

動物園に飼われているホッキョクグマが幸せかどうか、とりあえず食べるには事欠かず、かつ安全な暮らしが保証されているのは間違いない。柵の中を右往左往するホッキョクグマの様子に、作者はそれだけでは幸せではないと見る。食べ物を自力で探し危険と隣り合せの暮らしでも、何より野生には自由な世界が広がっている。幸せとは「その人にとって幸福であること」(『新明解国語辞典』)とあり、一概に決められないが、作者は自由こそが最良の価値と信じて、柵の中のホッキョクグマに同情してしまうのだ。

・ひだまりの広縁にかつて聞きいたる亡父の咳払いに似るわが咳払い
三神 進

い
広縁に父が座っていた時代から、どれほどの時が過ぎたのだろうか。気が付けば自身が父と同様に、縁側で咳払いをしていることに気づいたのだ。かつての父は威厳があり、その咳払いにも近寄りたいたいのを覚えたことだろう。父から作者に受け継がれ、小津安二郎の映画の一場面のような、昭和の父親の後ろ姿の見える歌である。

・「硫黄島の納豆」なる苗もらい来て父の植えしはオクラであった

柳沼きよ子

「硫黄島の納豆」という珍しい題材に目を引かれた歌。硫黄島と言えば太平洋戦争末期の玉砕の島、というイメージだが、あたかもそこから持ち帰ったかのような雰囲気がある。何のことはないネバネバの性質が、納豆に似通ったオクラのことだったとか。ネットで調べると烏オクラという種類があり、これに近いものか。オクラは可愛らしい花を咲かせるので、父を中心として家族みんながワクワクしながら、その成長を見守ったことだろう。

・雑踏になつかしき人とすれちがう二人の上の時時は流れて

安田 恵子

雑踏ですれ違った人は誰であったか、かつて心を寄せた相手かも知れない。都会に暮らしているとこんなことも起こり得るのだが、声を掛けたところで時の流れを戻せるわけもなく、すれ違いそのまま互いに遠ざかったのだ。だが、本当にその人は懐かしい人本人であったのか。年齢を重ねると風貌が変わり、他人の空似であったとしても不思議ではない。とはいえずれ違った一瞬、輝いていた時代

の過去の自身に出会ったようで、温かな気分になったのだ。

・大の里エツフェル塔のごと花道の奥に立ちおり負けると思えず

内海 恭子

この歌が作られた時期から考えると、二〇二四年の秋場所で関脇大の里が二度目の優勝を果たした折か。その後、大関に昇進しており、体格にも恵まれた大の里は、数十年に一度の逸材と言われている。花道の奥に立つ大の里を遠目に見て、エツフェル塔と見立てたところがユニークである。結句「負けると思えず」も効いている。

・半地下の店主一人のキッシュ屋さん月に一度の客なり我は

川久保百子

キッシュは、パイ生地などで作った器に肉や野菜を入れ、チーズをのせてオーブンで焼くという、近ごろ流行りのお洒落な料理のこと。そんなキッシュの専門店を発見した作者は、隠れ家を見つけたように秘密めかしてたまに通っているのだ。ありきたりの日常から少し外れたところにある、密かな楽しみを見つけたということ。ドラマのヒロインになった気分です店主と会話する作者が目につかぶ。いつか偶然を装ってふらりと入り、百子さんに逢いたいものだ。

・またひとつ病気が見つかり手のひらの薬七粒飲まねばならぬ

関口 洋子

いくつかの病気を養う作者に、さらに病名が加わり薬が増えたという、嘆きの歌である。医師から処方される薬はそれぞれ効用があり、病気によく効く薬には同時に副作用もある。その副作用を抑えるための薬も飲まなければならず、自ずと種類が増える。間違えないうよう幾種類も確かめながら飲む作者に同情を禁じ得ない。

村野次郎への旅(179)

昭和期の「香蘭」(十四)

今月から「香蘭」第五卷第八號(昭和二年

1927)年八月一日発行號を読むことにする。表紙畫裏畫及び題字は森田恒友、編輯兼發行人は田中次郎である。総頁数は59頁である。目次の最初は第一同人の短歌で出詠者は十名、村野次郎、筏井嘉一、橋本敏夫、本間樂寛、南部松若丸、川村浩、石野正太郎、橋本政一、杉浦翠子。

次いで大熊信行の覺書、第二同人の短歌十二名は眞島勝郎、成田憲三、松丸魁一郎、西村孝、住吉良康、日根まもる、横山信吾、若林昇、神谷葛三、森田定子、庚申薫、芦邨敏郎。前月歌壇合評(本間樂寛、今井嘉雄、杉浦翠子、村野次郎)。

葉月集に杉本喜一ほか九名が出詠、杉浦翠子のエッセイ筏井氏の傾向、夜光集(杉浦翠子選)に大貫迪子ほか二十九名、八月集(筏井嘉一選)に十七名、向日集(村野次郎選)

千々和久 幸

に三十五名が出詠。

壺中の天地(小エッセイ)に村野次郎など七名、歌會記事、編輯後記となっている。例によって巻頭の村野先生の歌から見ている。

炎天の道

村野 次郎

①わがゆくての夏日照りかへす一本道まつし
ろき蝶ひかりよざれり

②本堂のくらきに見れば奥庭の外は暑つから
し茅菅光れり(木更津長樂寺)

③昨夜ひとよ泊めてもらひしこの家の朝戸の
そとの行々子のこゑ(印旛沼にて)

④草刈りて歸ればすでに晝ちかし素足の裏に
あつき庭土

⑤清水こえて濡れし足跡炎天の道にししみで
すく乾きたり

⑥あし原の道暮れはててさわさわと頭にひく
く鳥の飛びゆきにけり

先生は例月六首程度の出詠だが、同欄の筏井嘉一はこの月は十九首、同本間樂寛は十首、南部松若丸に至っては二十三首だから、先生の寡作のほどが目立つ。時に先生三十三歳、若い時分から無欲恬淡であったものか。それはともかく作品をざっと見ておこう。

①の歌、いわゆる属目だが、格別のことを歌っている訳ではない。先生の作品には「光」がよく歌われているが、ここでも「照りかへす」がそれである。「夏日」に「蝶」を配したところがアクセントになっている。

②の歌、最初の歌から一転して「くらき」「本堂」が歌われている。僅かな時間の経過の中での明暗が、先生には印象深かったのである。

③の歌、「印旛沼にて」とあるが、昵懇の吉植庄亮の名前はない。だから「泊めてもらひし」家が氏の家であったかどうか即断は出来ない。またヨシキリの声はスマホで初めて聞いたが甲高く忙しない声で、多くの詩や流行歌に歌われているように美しくもロマンチックでもない。

④の歌、一連の一首と読むか、恐らく別の場面であろう。この一首だけでは判断出来ない。

いが、炎天下で午前中いっぱい草刈りをしたとなれば、これは重労働である。

⑤の歌、④の歌との連作であろうか。状況がはっきり見えない上に、「ししみて」が読解不能。広辞苑には「ししむ」（縮む）はあるが、「ししむ」は無い。古語辞典にもない言葉である。この歌もお手上げである。

⑥の歌、概念的には解るが、満腹出来るまでにはいかない。

以上、三十三歳の先生の歌を八十歳を過ぎたわたしが読むのだから、感覚のずれは致し方あるまい。

さて気を取り直して前月歌壇合評を読もう。今月の評者は井井嘉雄、本間樂寛、杉浦翠子、村野次郎である。

短歌雑誌

木の花のしろきを吾はみてみつつ白しと思ふこの小夜ふけを 前田 夕暮
流れ入る霧しめつばき朝の部屋に木の花白く活けられてある

（翠子）（一）のお歌、暗きと白きとの対照。かういふことも今は陳腐になりました。しか

し北原さんなんかだと、かういふ所にもうすこし味をもつて歌はれることがあるので、引きづられてゆくことがあります。このお歌など、「しろきを吾はみて」といはれて、また「白しと思ふ」などは下手です、「白しと思ふ」の方を「ひそけく」とか「さやけく」とかに言葉を変へるとまだいくらか技巧が出来ると思ひます。「みてみつつ」もまずい言葉です。このお歌は全部説明的で何の餘韻もありません。

（二）のお歌の方が、すこし見直せます。しかしかうなると、「木の花」では納まりません。何とか植物の名を明かにいひたくありません。部屋の中に持ち込んだのですから、前田さんなどは植物の名を澤山ご存じのくせにどうなすつたのでせう。

（次郎）白い花の重ねはよくないと前評者は云ふが、そんなことに拘泥せず歌ひ放しの所に作者の特色を見る。或は「思ふ」と云ふ事は表はず爲めに反つて必要であつたとも思はれる、北原氏の「薔薇の木に、ばらの花咲く、何事の不思議なけれど」と同じ境地に入つてゐると見るべきである。然し其が何程までエフェクチヴに表現されてゐるかは更に問題に

なるのである。

（二）一首の持つ觸覚は感じられるが、もつと強い求心力があつていい。尚、私の如き實感の確實な輪廓を造つて進まうと希つてゐる者にとつては木の花とだけの氣分一方からの此表現はどうしても不安である。

蒼穹

夜の窓

夜の窓をあけばかりに椎の木の若葉のにほひ鼻をおそひつ 岡野直七郎

部屋明りぢかにおよびて庭先の椎の青葉にわが影法師

（樂寛）第一首、情景は大體首肯できるが、あけしばかりといふやうな安易な句法を用ゐてゐる爲に、折角の清々しい氣分をぶちこはしにしてゐる。鼻をおそひつなども、それが椎の若葉であるだけに、もつと感覺の繊鋭さがあつていゝと思ふ。之ではいさ、か香ひの悪どさを覺える。第二首、作者は名詞止めでそこに餘韻を持たせる積りであらうが、この歌の主体が影法師である以上、叙述の半端な不完全なものといはざるをえない。恐らく二首ともよもや作者が會心の作でもあるまい。

以下次号

「香蘭」が日本短歌雑誌連盟から四回目の「優良歌誌賞」を受賞

日本短歌雑誌連盟では例年、春と秋に定期大会が開催されており、秋季には優良歌誌賞の授賞式が実施されています。コロナ禍の時期は対面の大会が中止続きでしたが、令和五年度の秋季大会から再開されています。

さて、令和六年度優良歌誌賞は「香蘭」「舟の会」「歌と観照」の三誌に決定され、昨年十一月二十三日（祝・土）に、千代田区ホテル・ルポール麹町を会場に開催の秋季定期大会において、その授賞式が執り行われました。

「香蘭」の同賞受賞は記録を確認の結果、

●一回目 昭和四十七年度（1972年度）

●二回目 当時の代表は村野次郎

●三回目 平成十六年度（2004年度）
創刊八十周年の翌年。授賞時の代表は千々和久幸、以下同

●四回目 平成二十六年（2014年度）
前年が創刊九十周年。また二十六年四月号で通巻一〇〇〇号を発行

（していた）

●今回 令和六年度（2024年度）
一年遅れの創刊一〇〇周年記念特集号（発行の年）

という経緯で今回が四回目に当たります。

誠に名誉なこと、当日は香蘭短歌会会員二十一名が授賞式に立ち会いました。

なお、香蘭に関わる別の賞では、平成三十二年度春季大会で、千々和代表が第十六回「特別功労賞」を受けています。

今回の秋季定期大会は、蔵増隆史事務局長の開会の辞に始まり、林田恒浩理事長の開会挨拶のあと、優良歌誌賞の授賞式に移り、受賞結社の紹介が三氏からなされました。

「香蘭」 紹介 小笠原信之氏（檜欖）

「舟の会」 紹介 生沼 義朗氏（短歌人）

「歌と観照」 紹介 三枝むつみ氏（水蓮）

林田理事長から表彰状が授与され、そのあ

と左記の方々が謝辞を述べました。

●「香蘭」 千々和久幸代表

●「舟の会」 依田 仁美氏

●「歌と観照」 小山 常光氏

謝辞で千々和代表は、「香蘭の受賞理由は創刊一〇〇周年ということ、村野次郎全歌集を刊行したと思うが、わたしは一〇〇周年の節目を、終刊号を見据える契機にしたいと訴えた。終刊号を出すではなく、見据える、見据えて新たな展望を切り拓く、という意味である」と、司会者からの要望時間内で簡潔に謝辞を述べました。

休憩のあと左記の記念講演が行われました。

春日いづみ氏『国家総動員法と色紙』

授賞式および記念講演を含む第一部は十五時過ぎに閉会となりました。

第二部として開催の懇親会には千々和代表、丸山選者、渡辺選者が参加しました。

（左頁に当日のスナップ写真を掲載します）



(上) 今回 (令和6年度) の表彰状
(下) 2回目 (平成16年度) の表彰状



(上) 「香蘭」の紹介を述べる小笠原信之氏 (権権)
(下) 謝辞を述べる千々和久幸代表



(当日参加した香蘭会員。左から右へ。敬称略) 市川、牧野、川原、中村(陽)、満木、石井、高島、渡辺、土井、原(礼)、丸山、竹本、千々和代表、関口、小笹、斎藤、阿部、川久保、塩田)。写真では19名だが、高田、中島(由)も参加

文人と医者

例年3月の明宝研究会でわたしは「回顧と展望」というタイトルで研究発表することになっている。何を回顧しどう展望するかは自由だからその折の気分を決めるのだが、今年は老いと死について漠然と考えていることをまとめてみたいと思う。

またどうい風吹き回しか、十月会では「現代短歌の最前線を斬る」という企画も予定されており、ゆっくり老いを楽しむ暇はなさそうだ。

ところで今回は「文人と医者」というタイトルを掲げたが、言いたいことは老いや死について文人と医者はどう考えているかを見ておきたかったからである。とはいえこれは目下わたしが読み止している黒井千次と久坂部羊などの著作の範囲内に過ぎず、それを即文人と医者一般に普遍化する気は無い。が、少なくともその手掛かりくらいになればと言う色気が、この一文の由来である。

さて世上議論の多いPPk(ピンピンと元気に老いて、死ぬときは寝つかずコロリと逝く)について、文人の黒井千次はこう言う。

「そもそも、この暑い夏に病院通いなどしているようでは、とてもピンピンして生きているとはいえない。つまり、前提がすっかりしていない以上、コロリも成立しないわけである。こちらに許される

のは、ピンピンコロリではなく、ベンベンゴロリとでもいったあたりか。黒井千次『老いの味わい』

一方、医者の意見はこうだ。「冷静に考えればすぐわかることです、若いときから健康に注意して、節制しながら生活していれば、内臓が丈夫な分、コロリとは死ねません。コロリと死ぬのは、若いうちから不摂生をしてきた人です。ヘビースモーカーで、毎晩酒を飲み、カロリーオーバーで肥満し、ストレスいっぱい生活で、睡眠不足、運動不足で、血液検査は異常値ばかりという人が、心筋梗塞や脳卒中でコロリと死ぬのです(不幸にして死ねなかった場合は、麻痺が残ったりして不如意な生活を強いられますが)」。久坂部羊『人はどう死ぬのか』

久坂部説には思わず笑って仕舞った。そしてシユンとなった。老いと死に関する限り、文人はロマンチストで医者はリアリスト、などとやっている場合ではなからう。文人は老いや死を呑気にまたあらまほしき憧れのレベルで考え、医者の方はごく常識的に扱う。

わたしも久坂部説に出会うまで、PPkに憧れていたのである。そしてこれが論理矛盾であることを知らされた。死とは冷厳な事実であることは頭の中では解っているつもりだが、PPkはもつとも残酷な死であることが解る。汝、ふわふわしたPPkを望むや。

古い話だが、プロレタリア作家の徳永直(1899-1958)が胃癌で死去したとき、世の識者は、社会体制のありようを分析・批判する作家が、自らの癌を見抜けず死ぬとは、という批判めいた言葉を聞いたことを思い出す。文人の徳永直もまた社会変革を夢みたロマンチストとして死んだのだった。

一頁公論

(46)

もう一度訪ねたい場所

宮城県石巻市立大川小学校

関 哲行

二〇一一年三月十一日午後二時四十六分宮城県沖で巨大地震が発生し、宮城県栗原市では震度七を観測、いわゆる3・11震災である。この震災で私が最も気になったのは宮城県石巻市立大川小学校74名の児童のことである。学校は北上川の河口よりおよそ4 km上流の土手を挟んで反対側にあった。震災前は全校生徒一〇八人のこぢんまりとした学校であったという。ところが3・11震災で悲惨な状況に一変した。

地震発生と同時に児童全員が校庭に集合した。幾人かは迎えに来た父兄と帰られた。校庭に残ったのは児童78名と教師11名であった。校庭のすぐ横には裏山があり、児童の足でも

に避難可能な場所である。その高台に向かって数人の児童が走り出したが教師の制止で引き返した。

津波警報が出された中、教師達も避難場所に苦慮されたであろうが時間はどんどん進む。結局、川沿いの高地に決めたのは地震発生からおよそ45分は経過していたであろう。

避難を開始したがすでに遅かった、児童達の前方から途轍もない巨大な津波が押し寄せた。その後は真つ暗闇の生き地獄であったろう。犠牲になったのは児童74名、教師10名、奇跡的に児童4名、教師1名が助かった。

津波は校舎の二階の天井まで達し、大時計は津波が押し寄せた15時36分を指したまま止まっていた。

震災から8年後、私は大川小学校を訪れる機会を得た。まず驚いたことは、犠牲となつた児童74名のうち4名は現在も行方不明のままであること、また、今以て校庭の土を小型ブルドーザーで掘り返しわが子を探し求めている遺族の姿に胸が締め付けられる思いであった。問題の裏山の高台に登ってみた。登りでもそれ程きつくもなく、ここに避難して

おれば子ども達は無事であつたらうと残念に思いつつ手を合わせた。子供たちは時折ここで遊んでいたという。屋外ステージの壁面には児童が描いた世界の民族衣装を着た人たちが色鮮やかに描かれており、子供たちからの贈り物と受け取った。すぐ前に見える北上川は静かに流れている。

津波を受けながらも一人も犠牲者が出なかった(出さなかつた)学校もある。そことは何が違っていたのだろうか。教師らが災害に対する危機管理意識が薄かつたのではなからうか。一刻も余裕のない状況で約40分間も児童を校庭に待機させたこと、避難訓練も行っていないのに教育委員会には実施の報告をしていたこと等が判明して大川小学校の悲劇は正しく人災であつたと思わざるをえない。

大川小学校は廃校とし、震災遺構として保存することが決定している。

児童74名の尊い命が亡くなったことに避難のあり方を考えつつ児童の弔いに行きたい心境である。